

自由を求めた

第二王子の
勝手気ままな

辺境ライフ3



著 おとら



カルラ

クレスの姉。
弟をととても
溺愛している。

セリーヌ

好奇心旺盛な
エルフの少女。
人族の常識に疎い
ところがある。

クオン

クレスの付き人。
こくろうぞく
黒狼族という種族の獣人。
高い身体能力を
有する。

アーク

クレスの幼馴染で
親友。槍を使った
戦闘が得意。

アスナ

クレスの幼馴染。
元気で猪突猛進な
性格。

クレス

本作の主人公。
自由な生活を求めて、
わざと辺境に追放され、
領主となった。

CHARACTERS

第一章 エルフとの遭遇

無事にエトラス王国との交渉が終わり、俺達は領地へ帰ることに。

今後は密接に交流を深めていくことを約束した。

それを知らしめるためもあり、国境までユリアンさんが見送りに来てくれた。

準備を終え、代表者同士が門の前で最後の挨拶をする。

「クレス殿、この度は誠に感謝する」

「ちよっ……頭を上げてくださいって！」

「いや、そういうわけにはいかない。国のこともそうだが、騎士達のためにひんやりシートなる物を開発してくれた。何より、セネリオのことが……この恩は忘れない。セネリオも、必ずそう伝えてくださいと言っていた」

ひんやりシートとは俺の冷気を魔石に込めた物で、お土産と交換で渡した物だ。

セネリオ君も見送りに来たかったそうなのだが、流石に止めてもらった。

折角元気になってきたのに、ぶり返したら意味がないし。

その代わり、元気になったら彼らが遊びに来ることになった。

「はあ……分かりました。お礼は受け取るので頭を上げてください」

「ふふ、頭を下げた方がお願いされるとはね。相変わらず不思議な殿方だ」

「慣れてないんですよ。では今後のことは手筈通りに」

「まずは共同で街道整備を行い、物資や人の交流をしていくことだったな」

「ええ。では、そろそろ行きますね」

「気をつけて帰ってくれ——皆の者！ クレス王子一行に敬礼！」

俺が手を振ると、後ろにいた騎士達が一糸乱れずに敬礼する。

俺の開発したひんやりシートを貼っていて笑ってしまっけれど、その姿は美しい。

これが騎士の国エトラスなのだと目に焼き付け、俺達は国境を出発する。

数日後、辺境都市ナバールに到着した。

「か、帰ってきたアアアア！」

「うるさいですよ」

「うるせえやつだな」

「騒がしいやつだ」

クオン、アーク、タイガさんに突っ込まれた。

自国に戻ったからか、王子に対して遠慮なしである……元々だっけ。

ただここは譲れない……グータラ王子として。

「仕方ないじゃん！ 色々想定外だし王子のフリ疲れたし！」

「いや、真正正銘王子ですから。まあ、主人殿にしては頑張ってたかなと」

「でしょ!? というわけで、休暇に入ります！ 姉さんにはみんなから報告しておいて！」

「ダメに決まっています。そんなことをしたらカルラ様が暴れますよ？ ほら、行きましょう」

「ヤダアアアアア！ 休ませてええ！」

俺の懇願虚しく、引きずられるようにしてクオンに連れていかれた。

そして後ろには笑顔で手を振る親友と、寝ているレナちゃんを抱っこするタイガさんの姿が。

「クレスー！ 俺は一足先に休むから頑張れよー！」

「俺はレナを送っていくのでな」

「み、見捨てられた！ ずるい！」

「ずるくないですって。というか、報告は領主である主人殿の役目です。そもそも、主人殿の代わりに働いているのですから」

ぐうの音も出ず、俺は、仕方ないので諦めた。

そうして領主の館に到着すると……満身創痍のマイルさんがいた。

「マ、マイルさん！ 一体何が!?」

「ク、クレス殿下……よくお帰りになされました……あとは任せましたよ」

「マ、マイルさああん！ 死なないでええ！」

倒れこむマイルさんを抱きしめると、後ろからクオンに叩かれた。

「死んでませんって……多分、疲れただけですよ。というか、さっきからテンション高いですね」

「ナチュラルハイってやつ！ 早く寝たい！」

「またよく分からない言葉を……では、さっさと行きましょう」

「とうか帰ろう！ 嫌な予感がする！」

「ダメですって、諦めましょう」

マイルさんをメイドさんに預け、領主の部屋に向かう。

すると、扉が開き……次の瞬間、全身に痛みが走る！

「イタタタタタ!？」

「クレス！ お姉ちゃんは寂しかった！」

「わ、分かったから！」

これあれだ！ 鯖折さほりくらってる！

相変わらず目で追えない速さ！

「カルラ様、落ち着いてください」

「むっ、私は落ち着いてる。だからクレスを抱きしめてる」

「アアア……」

疲れていたこともあり、俺は意識を手放したのだった。

「……ふう、酷い目に遭った」

「ごめんなさい」

「まあ、結果オーライだから良いよ」

俺が気を失ってる間に、代わりにクオンが報告してくれたみたいだ。
なので、俺の仕事はほとんどない。

「そう？ じゃあ、もう一回……」

「それはやめてください！」

「むう……私、頑張ったのに」

「それについては感謝します……まあ、加減するなら良いですよ」

「っ——！」

すると一瞬で間合いを詰められ、俺はソファアにて抱き枕と化した。
諦めて、その体勢のまま話を進める。

「それで、そっちは何かあったの？」

「ん、特に問題はない」

「いや、でもマイルさんが死にそうだったけど？」

「クレスに褒められたいからお仕事頑張った。彼は思ったより優秀だったから色々使ってた」

「ああー……」

馬車馬のようにこき使われたってことか。

マイルさんはなまじ優秀だからついていけちゃったと。

マイルさんには悪いが、俺の仕事が減ってるならありがたい。

「クレス、私を褒めると良い」

「ははー！ 姉さんは偉い！」

「えへへ、褒められた」

「コホン……主人殿にも説明しておきましょう」

その後、クオンから片付けた仕事内容を聞いた。

書類仕事は全て終わり、都市の開発も進めたとか。

そして驚くことに……すでに街道整備に手をつけていた。

「どうということ？」

「程度はどうであれ、クレスが成功させるのは分かった。だからすぐに街道整備に取り掛かれるようにドワーフ達にお願いしておいた。あとは、クレスの号令があればすぐに始められる」

「い、いや、流石に父上の許可がいるんじゃない？」

「街道整備なら問題ない。お金に関しても、さっきクオンから聞いた報酬なら初期費用くらいはある」

「これもレナ様のおかげかと。交渉で、随分といただきましたから」

どうやら、俺がいないところで話が進んでいたらしい。

いやはや、レナちゃんを連れてって正解だった。

……またしても何も知らない領主クレス君です。

「ふんふん、それじゃすぐにでも始めちゃおうか。そうすれば卵とか海産物が手に入るわけだし」

「ん、分かった。じゃあ、すぐにマイルを……」

「ま、待った！ 俺も休みたいし、三日後くらいにしよう！」

「そう？ ならそれで良い」

ふう、アブナイアブナイ。

あんな状態のマイルさんを働かせたら死んじゃうよ。

というか、俺だって休みたいし。

「では、ひとまず話は終わりですね……私はこれで」

「あれ？ クオン、一人でどこ行くの？」

「主人殿には対価を支払う仕事がつてるので」

「どうということ……」

「あれだけの仕事量を見せられたら、止めることはできません」

何のことかと思いい、あとを追おうとすると……姉さんにホールドされた。痛くはないが、何やら寒気がしてきた。

「ね、姉さん？」

「クオンから報酬としてクレスを好きにして良い権利をもらった。今日は、お姉ちゃんと一緒」
「なっ……クオン!？」

時すでにお寿司、いや、遅し……クオンはそそくさと部屋から出ていった。

残されたのはホールドされた俺とホールドする姉さん。

……売られたアアアア!

その後、屋敷の中に俺の悲鳴がこだまするのだった。

翌日の昼過ぎ、俺はようやく休みを手に入れた。

理由は、ひとまず姉さんが満足したからだ。

「や、やっと終わった……」

「お疲れ様でした」

「……心配そうな顔してるけど裏切ったよね？」

「何のことでしょう？ 私が主人殿を裏切るなどあり得ません。ただ、家族の時間を邪魔すること

はできませんから」

「ぐぬぬ……まあ、いいか」

あれを止められるのは俺だけで、姉さんが喜んでいたのは事実だし。

抱き枕になったり、ご飯を食べさせてもらったり……お風呂だけはどうか避けられた。

とにかく、これでしばらくは平気なはず……多分。

「それで、俺が姉さんの相手をしてるうちに何かあった？」

「いえ、特には……ただ主人殿にしかできない仕事がたまってますね。暑さによって氷魔石の消費が激しいようです」

「ああー氷魔法の補充か。んじゃ、まずは挨拶回りのついでにやろうか」

「おや、休まなくていいんですか？」

「苦しんでる人がいるのに休めないし」

「ふふ、それでこそ我が主人殿です」

いえ、初心者なだけなんだけど。

ただクオンが微笑んでるので良しとしますか。

その後、改めて挨拶回りに向かう。

まずは庭で剣を振ってるアスナのところに行く……なぜか仏頂面ぶつちやうめんをしていた。

「なんですでに怒ってるの？」

「お、怒ってなんかいいわよ……むう」

明らかに怒っているが、何やら様子が変だ。

なんだろう、怒ってるけど落ち込んでるみたいなの。

すると、クオンが耳打ちをしてくる。

「主人殿、アスナ様にはまだ帰ってきた挨拶をしてません。そしてアスナ様にもお礼を言わないと」

「あつ、そうか……アスナ、ただいま。それと、留守の間ありがとね」

「お、お帰りなさい……私だって頑張ったもん」

「うんうん、きちんとお礼はするから」

「ほんと？ ……えへへ、楽しみにしてるわ」

そう言い、両頬を押さえて去っていく。

どうやら機嫌は直ったみたいで良かった。

「主人殿、やりますね」

「ん？ なにが？」

「……無自覚ですか。あとで血が流れないことを願いますね」

「怖いこと言わないで!? なにをしたらしいの!？」

「きちんとお礼をすることですね」

「……頑張る」

何となく選択を間違えた気がする。

俺はアスナへのお礼に頭を悩ませながら、挨拶回りに戻るのだった。

一緒に行った人達への挨拶は軽く済ませ、屋敷を出て牛小屋にいるガルフさんの元に向かう。

「ガルフさん、こんにちは」

「クレス、帰って来おったか。昨日は大変だったみたいじゃな？」

「あはは……ガルフさん達にもご迷惑をおかけしました」

「なに、ワシらは大したことはない。仕事のあとのラガービールが旨いからもう」

聞いたところによると、ラガービールの製造は順調らしい。

このままいけば特産品になるし、ドワーフ族との交流にも使えるだろう。

今後は街道整備もあるし、ドワーフ族とは仲良くしないとだ。

「それは何よりです。それで、モウル達の様子は？」

「うむ、元気に過ごしておる。しかし、そろそろ新しい番^{つかい}を連れてこんど。ミルクだって永遠に出るわけじゃない」

「そうだよね……よし、まずはそっちらいきますか。森の開拓と、モウル捕獲作戦だね」

「これから人も増えるし街道整備もあるので、木はいくらあっても困らん」

俺はモウルの様子を見たあと、再び挨拶回りに向かう。

そして帰ってきたことを報告し終えたら、一度屋敷に戻った。

「よし、まずは整理しよう。最優先は街道整備かな？」

「ええ、そうしないと卵などの物資も届かないかと」

「卵はいくつかもらったけど、小さいからすぐに使い切っちゃうしね。ただ、運搬方法を考えないとかあ」

卵は熱に弱いので、我が領地に来る前に傷んでしまう。

今回は俺がいたから持ち帰れたけど……俺の氷魔石を輸送に使っても良いけど、他の食材にも使いたいしキリがないというか。

「時間がかかりすぎるのがネックですね。それに運搬中の暑さも」

「うん、暑さ対策と時間短縮する方法を考えておこうか」

「とりあえず、今すぐできることは森の開拓ですね」

「んじゃ、早速いくとしますか」

「おや、珍しくやる気ですね？」

「そりゃ、海産物や卵のためですから。卵があればアイスもたくさん作れるよ？」

「——今すぐいきましよう」

「わ、分かったから！ 引つ張らないでえええ！」

再び時すでにお寿司状態、目を輝かせたクオンによつて部屋から連れ出されるのでした。

すぐにメンバーが召集され、アークとタイガさん、それとクオンとアスナで行くことに。

姉さんは疲れたからか、今はぐっすり眠ってるらしい。

「レナちゃん、姉さんをよろしくね」

「はいですの！ 皆さんもお気をつけて！」

「ありがとう。それじゃ、行ってくる」

レナちゃんは旅から帰ってきてから、精神的に動いているらしい。

なんでも、立派なレディになるためだとか。

きっと、俺の知らないところで何かあったんだろうね。

屋敷から出て都市の入り口で馬車を待つて間、近くのベンチにアークと並んで座る。

「やれやれ、隅に置けない男だねえ」

「あ？ そんなんじゃないやねえし。というか、人のこと言えんのか？」

「なにが？」

「はあ、俺より鈍感な奴……」

「とにかく、レナちゃんを泣かせたら……死ぬよ？」

「……それは分かってる」

レナちゃんの父上、それは我が国最強の魔法使いにして娘溺愛の方。

手を出しても殺されるし、振って泣かせても殺されるに違いない……詰んでない？

「アーク、元気でね」

「勝手に殺すな！　というか、お前だってアスナの件で殺されるぞ。なにせ、お前を追ってきたんだからな」

「そういやそうだった……親友、死ぬときは一緒だね！」

「はっ、都合のいい親友なこと」

「二人共ー！　早く行くわよー！」

アスナに呼ばれたので、俺達は慌てて馬車に乗り込む。

ほどなく北の森に着き、新しくできた砦に馬車を預けた。

まずは現状確認のため、責任者から話を聞く。

「何か異変はあるかな？」

「異常ありません！　クレス殿下方がブラックラビットを倒してくださったので開拓が安全に進んでおります！」

「そっか、やっぱり倒しておいて正解だったね。それじゃ、探索は奥の方まで？」

「いえ！　それは危険とのことでマイル様から止められ、クレス殿下達に任せるようにと！」

「なるほど、分かった。それじゃ、現段階の探索地点まで案内してくれる？」

「畏まりました！」

そして兵士の案内の元、森を進んでいく。

言った通りに道ができていて、これなら普通の人も問題ない。

やがて、まだ道ができていないところに辿り着く。

「ふむふむ、つまりこの辺りの木は切っても平気だと」

「そうですね。街道整備にも必要ですし、切ってもいいかと。よろしければ、私がやりますか？」

「いやいや、それじゃ日が暮れちゃうよ……兵士さん、この辺りに作業してる人は？」

「この辺りには今はおりません」

「んじゃ、問題なしと……みんなー！　危ないから離れて！」

俺がそう言っても、アーク達はどうもかく、兵士達が中々離れようとしなない。

そうだった、俺はこう見えても第二王子だった。

すると、クオンが手を叩く。

「はあ……皆さん、主人の言う通り離れてください。そして、主人がやらかすので注意をしてください」

「クオンさんや……酷くない？」

「決定事項です。それとも、大ごとにしない自信が？」

「コントロールしてみせるさ！　圧縮された水よ全てを切り裂け——アクアレーザー——」
掌から高圧縮された水が放たれ、木々をなぎ倒していく！

しかし水平線の向こうまで行くことはなく、視界に収まる範囲に留めた。

「どうだ!? これならやりすぎじゃないでしょ?」

「これは見事です、失礼いたしました。随分と魔力調整が上手になりましたね」

「ふふふ、大分感覚が掴めてきたから」

「なるほど、今まではサボっていたと」

「……ぐぬぬ」

「ふふ、冗談ですよ。よくできましたね」

その後、ついてきた兵士達に木々の処理を任せて俺達は森を進む。

先頭はクオンに俺、真ん中にアークとアスナ、後ろにタイガさんが続く。

話によるとモウルの目撃情報があり、危険が減ったのでこっち側に來てるかもしれないとのこと。

「ふむふむ、そしたら次はモウルだね」

「何か作戦があるのですか?」

「モウルは大人しいから、最初に作った氷の塊かまきりを作ろうかなって。ああいうのを森のいたる所に設置すれば寄ってくるかなって」

「しかし、モウル以外にも寄ってくるのでは?」

「それはそうだね……ひとまず、この辺りの魔物や魔獣を倒しておこうか」

「そうですね。食料や魔石も手に入りますし」

話はまとまったので、全員に作戦を伝える。

氷の塊を設置し、モウルをおびきだすこと。

その際に來る魔物や魔獣を俺達で倒すこと。

「なるほどねえ……作戦と言えるか微妙だが、クレスの氷に惹かれたのは間違いないか」

「私は別に良いわよ。ずっと室内にいたからうずうずしてるし」

「となると音や気配を拾うことが重要だな。それなら、俺とクオンは遊撃に回るか」

「そうですね。モウル以外の魔獣や魔物が近づいたらすぐに始末しましょう」

「んじゃ、俺はひたすら魔法を込めれば良いと」

サクッと打ち合わせを終え、すぐに行動開始である。

まずは森を進み、魔物を狩っていく。

上位種も出てくるが、クオンやアスナが瞬殺である。

「おおっ! 二人共強くなってる!」

「ふふ、日々鍛錬を積んできますから。旅の中、違う環境で過ごしたのも大きいかと」

「えへへ、私だって遊んでたわけじゃないもの。実はカルラ様に稽古をつけてもらったり」

「うんうん、凄いや。俺も魔力調整が上手くなったし、これならもつと奥に行けるね」

奥にはまだ見ぬ素材や、ダンジョンなんかもあるかもしれない。

それに、この森の何処かにエルフがいるって噂だし。

「はっ、これは負けらんねえ」

「うむ、女子達ばかりに良い格好はさせられんな」

次はアークとタイガさんが前に出て魔物を蹴散らしていく。

俺はすることもなく、ただのんびりと森を進んでいくのだった。

それから時間が経った。そろそろ引き返さないと帰る頃には日暮れになってしまう。

「うーん、この辺りが限界かな」

「そうですね。万が一泊まることになるかと面倒ですから」

「それじゃ、この辺りに仕掛けようか」

俺は空いてるスペースに氷の塊を作成していく。

すると、ある物が目に入った。

「ねえねえ、あれって……」

「どうしたのです？ ……木の上に何やら赤い果実がありますね」

「クオン！ 採ってきて！」

「はいはい、分かりました」

俺の予想が当たってれば、アレは……。

そしてクオンが採ってきて、予想が当たっていたことが確定した。

「やっぱりイチゴだ！ 暑いのによくあつたなあ」

「イチゴとは何ですか？」

「そっか、知らないよね。暑さに弱い果物で、多分市中には出回ってないはず。何でここにあるんだろう」

「そういえば、この辺りだけ涼しい気がしますね」

「……言われてみれば」

平地の気温は三十度を軽く超え、森の中でも三十度前後。

でもこの辺りは体感的に三十度を下回ってる気がする。

「調べるので少し待ってくださいね……なるほど」

「何か分かった？」

「この辺り一帯に清涼な空気が流れています。近くで川の音がするので、そこから風が吹いているのかも知れません」

「なるほど、川の冷たい空気が通ってる道ってことか。それじゃ、場所を覚えておかないと」

「もう記憶しました。では、いくつか持っていきましょう」

合流した皆と手分けして、イチゴを収穫する。

これはデザートにも使えるぞ〜。

「ふふふ……楽しみだなあ」

「クレス、これは何になるの？」

「食べても良いし、ジャムとかにすると美味しいよ。特に……氷との相性が良い」
「ふーん、そうなのね」

アスナはピンときてないが、作ったら驚くぞー。

そのまま氷の塊を十個ほど作ったら、少し離れて様子を窺う。

真ん中に俺とアークとアスナ、少し離れて左右にクオンとタイガさんが配置に着く。

「本当にこんなので来るのかしら？」

「さあ？ 分かんない」

「まあ、物は試していいじゃねえか。それより、魔力は問題ないのか？」

「余裕だね……というか、前より楽かも」

やっぱり、体が魔法に慣れてきたのかもしれない。

これだったら、相当無茶なことをしても平気かも。

そんなことを考えていると、左右にいる二人が右手を挙げる。

それはモウル以外の生き物が現れたことを指す。

「来たね。んじゃ、アークとアスナよろしく」

「ええ、任せなさい」

「おう、お前は動くんじゃねえぞ」

アークはタイガさんの方に、アスナはクオンの方に行く。

俺は自分の周りに氷のかまくらを作り、その中に閉じこもる。

すると、ものの数分で二人が戻ってきた。

「オーク共だったな」

「こっちはゴ布林だったわ。もつと強いのないかしら」

「それはそれで面倒だよ……ふぁ……眠くなってきた」

「涼しいところにいるからだろ。ずるいぞ、俺も入れろ」

「私だって暑いわ。というか、こっちは戦ってるのになんてもの作ってるのよ」

「ちよつと……!？」

左右に二人が入りギュウギュウ詰めになる。

右隣のアークはともかく、左隣のアスナと密着するのは困る。

「何だよこれ！ めちゃくちゃ涼しいじゃん！」

「ほんと！ 部屋に欲しいわ！」

「いや、びしゃびしゃになるから」

アスナは興奮してるからか、俺と密着することに気づいてない。

それこそ、肌と肌が触れ合ってるくらいだ。

……って、何を意識してるんだろ。

「というか、これじゃ外の合図が見えないじゃん」

「あっ……」

「全く、何をやってるかと思えば……」

アークとアスナが惚ける中、クオンが穴から覗き込んでいた。

「ほら、二人のせいでクオンに怒られるじゃん」

「いや、叱るのは主人殿だけです」

「何で!？」

「こんなの作ったら入りたいに決まってるじゃないですか。それよりも、本命らしき気配がしましたよ」

俺達は慌ててかまくらから出た。

かまくらを解除し、再び同じフォーメーションを組んでその時を待つ。
すると、モウルが数頭やってきた。

「それで、どうするのよ？」

「……どうしよう？」

「考えてなかったんかい」

「殴って良いかしら？」

「ま、待って……すぐに考えるから……!」

まずはお試しでと思ったから、実際に来るなんて思わないじゃん!

えっと、彼らを刺激しないようにするには冷たさが必要で……上手く誘導するには。

そうか、あの時みたいにアーチを作れば良い。

まずは氷の塊を解除し、目の前に新たな氷魔法を展開する。

「よし、浮かんだ。氷の壁——アイスウォール」

「おおっ、騎士の国でも作った氷のアーチか」

「これをどうするのよ？」

「大丈夫、前と同じように来るはず……よし」

モウルは最初は警戒していたが、すぐに氷のアーチの中に入った。
そのままこちらにトコトコと歩いてきた。

「よしよし、このまま都市まで連れていくよ」

「魔力が保つのか……いや、お前は規格外だとは思ってたが」

「はあ、もう良いわ。それじゃ、私は二人に伝えてくる」

二人がため息をつき、それぞれ動く……解せぬ。

既存のアーチを解除し、すぐ側に新しいアーチを作る。

モウル達は涼しいからか、大人しく前進してきた。

すると、クオンが単独でやってくる。

「クオン。見て、良い感じだよ」

「また規格外なことを……確認ですが、都市まで保つのですね？ 途中でへばって解除したら、モウル達は暴れますよ？ 言っておきますが、彼らは本来強い魔獣なのでから」

「全然余裕さ。それより、近づいてきた魔物や魔獣をよろしく」

「アーク様、警戒をお任せしてもよろしいですか？ 私は主人殿の護衛がごきます故」

「おうよ、任せとけ」

アークを見送ったあと、俺は自分の周りに氷を漂わせる。

そして引率の先生の気分で、バックで下がりながらモウル達を先導していく。

「ほら、こっちだよ、涼しいよ」

「モウ」

「ちゃんと付いてきてますね」

「ウンウン、このままいけば」

「——主人殿！」

「うわっ!？」

急に抱きあげられ、クオンが飛び跳ねる！

そしてさっきまで俺がいた場所には、矢が突き刺さっていた。

「な、何!？」

「何者です！ 出てきなさい！」

「へえ、これを避けるんだ？ 流石は黒狼族（じくろうぞく）といったところかしら？」

その声は木の上からする。

見上げると……そこには彫像のような美少女がいた。

黄金に輝く髪にほんのり尖った耳（とが）、切れ長の目とシュツとした輪郭。

手足も長く、まるでモデルのようだ。

そして俺の認識が正しければ……彼女はエルフである。

「よくも主人殿を……！」

「クオン！ ストップ！」

「しかし！」

激昂するクオンをどうにか抑える。

相変わらず、俺が絡むと視野が狭くなるらしい。

だけど彼女は、こっちを殺す気はなさそう。

「俺なら大丈夫。それに刺さった位置からして頭を狙ってない……殺すつもりはないんですよ？」

「ふーん、随分と冷静ね。見たことない魔法を使ってるみたいだけど……ええ、殺すのは掟（おきて）で禁止されてるし。少しビビらせたら帰るかと思って」

「ということ、俺達は君達の領域に勝手に入っちゃったのかな？」

「そうよ。古の時より平地は人族に譲り、森の奥地は我らの領域とする、と決まっている」



きつと大昔の人達が決めて、それが未だに続いてるって感じかな。

真偽はともかく、まずは敵対しないことが大事だ。

何よりモウル達を刺激したくない。

「それについては謝罪するよ。ただ、俺達も領地開拓をしてるだけなんだ」

「領地？ まさか、ナバルって今もあるの？」

「うん、あるよ。俺はその領主で、この辺りを色々と調べてるんだ」

「領主……それで、この森を焼き払うの？ それとも私達を捕まえる？」

「いいや、そんなことはしないよ。ただ、少し話を聞かせてほしいかな」

「……分かったわ」

弓を下ろし、エルフが木から降りてくる。

圧倒的な美貌だが、普段からクオンを見てるからか気にならない。

そう考えると、クオンは美人さんなんだよなあと今さらながら思う。

幸いモウル達は大人しくしてるので、まずはこちらに集中する。

「えっと、確認だけど貴方はエルフ族なのかな？」

「ええ、そうよ」

「この森の奥地に住んでるの？」

「……さあね」

まあ、そりや隠すよね！。

そもそも人と関わりがないってことは、何か嫌なことがあって離れたんだろうし。

「まあ、それはいいや。それで、そっちは何か質問あるかな？」

「貴方達の目的は何？」

「さっきも言ったけど森の開拓。でも、貴方達の生活を脅かすつもりはないよ。ただ、資源が欲しいかなって」

「ここより先は我らエルフ族の領域だけど……ここはギリギリ範囲外というか空白地帯なのよ。だから、ここまでなら許せるわ」

ふむふむ、両方にとつての区切りの場所ってことか。

俺としてはもつと奥に行きたいけど、目的の物は手に入ってから贅沢は言わない。

「言い分は分かった。でも、どうして俺達が来たって分かったの？」

「風の様子が変わったから、それで様子を見に来たの」

「そっか、エルフ族は風を司る……何か欲しい物はある？　それでそれをあげる代わりに、風魔法を魔石に込めてもらえないか？」

「欲しい物……その氷は貴方が作ったの？」

「うん、俺の水魔法だね……ん？　氷を知ってるの？」

「伝説級の魔法だけど、里の長老が若い時に使い手がいたとか。あと昔は雪山に氷があったみ

たい」

伝承ではエルフは千年を生きるとか……その時は温暖化が進んでなかったのかも。

それなら氷を知ってて当然だ。

そして、その有用性も理解してるはず。

「どうかな？　うちと交流すれば氷を提供できるよ？」

「むっ……確かに魅力的だわ。野菜や果物は暑さに弱く、最近は採れなくなっているし」

「もしかして……イチゴ栽培とかしてる？　さっき、あの辺りに生^なっていたけど」

「そうよ、あそこは川から近くて風通しが良いから。定期的に風魔法を使ったり点検したりしてるわ」

「ごめん、少しもらっちゃった。そうだ、お詫びの印にこれあげる。これには氷が込められてるから好きに使って」

俺は袋から氷の塊が入った魔石を取り出す。

勝手に彼らの果物を採っちゃったわけだから。

「まあ、それなら……変な人族ね。人族は自分勝手に欲にまみれてるから危険だって教わったのに」
「否定はしないけど、人それぞれってやつかな。俺は、自分がされたら嫌なことはしないことにしてるだけ」

「ふーん……面白いわね」

「はは……あつ、ちよつと待つてね」

さつき採ったイチゴを瞬間冷凍させる。

こうすれば甘みや水分が逃げないので、旨味も凝縮されたはず。

そして、まずは毒味として食べることにした。

口に含むと、甘酸っぱい味とキンキンに冷えた冷たさが広がった。

「くぅぅ！ 甘くて冷たい！」

「な、何よそれ！ ……凍らせたのね」

「そそつ、良かったら食べます？」

「変なことはしてないみたいね……いたたくわ」

恐る恐る口に入れると……目を見開く。

「——シャリシャリして美味しいわ！」

「ふふふ、美味しいよね——」

「……これは取引材料になるわ。いくつかもらってもいい？」

「ええ、もちろんです」

「ありがとう……エルフは施しを受けない、だから代わりにこれをあげるわ。風の魔法が込められてるから好きに使いなさい。人族の魔法より長時間もつはずよ。それと、私の名前はセリーヌよ」

「わぁー！ セリーヌさんありがとう！ あつ、俺はクレスつて言います」

やったあ！ これで扇風機とかエアコンもどきが作れるぞ！

帰ったら、早速ドワーフさん達に頼まないと！

「クレスね……さて、そこのお姉さんが怖い顔してるし、なんだか人が増えそうだから帰るわ」

「ま、待つて！ 貴方と会うにはどうしたらいいの？」

「そうね……同じ場所に十日後に来てくれれば良いわ」

「分かった。とりあえず、兵士達にはここから奥には行かないように言っておく。あれ？ 今さら

だけどモウルは連れてつて平気？」

「それは助かるわ。モウルは別に私達が飼ってるわけじゃなくて、ここが涼しいからいるだけよ……それじゃね、とりあえず長老に聞いてみるから」

そう言つて飛び跳ね、木々の上を伝つて去っていく。

おそろく魔法でジャンプ力やスピードを強化してるに違いない。

「クオン、怖い顔だつて」

「当たり前じゃないですか、あのまま戦闘になつてもおかしくなかったのですよ？ まだエルフがどんな種族かも分かってないのに」

「でも平気だつたじゃない」

「はあ……主人殿のそういうところ、本当に凄と思います」

「……褒めてる？」

「ふふ、どうでしょうね」

すると、異変に気付いた皆が戻ってきた。

俺は説明をしつつ、再びモウルを誘導するのだった。

そして無事に皆までやってきた。

「ふう、ここまでくれば一安心だ」

「休憩しますか？」

「ううん、もうすぐ日が暮れるしこのまま都市まで帰ろう。最悪、夜になっても良い」

「分かりました。それでは、私が先行して道を作っておきますね」

「うん、よろしく」

クオンを先に行かせ、三人と一緒に歩いていく。

「ずるいわよね、私だってエルフと会いたかった」

「そのうち会えるさ。それに、みんながいたらきつと来なかったよ」

「なるほど、それは言ってるな。しかし、美人だったか？」

「そりゃあね。今まで見たことがないくらい綺麗ではあった」

「ふーん……そう」

「いたった?」

なぜか思い切りほつぺを引っ張られています！

「次に会う時は、絶対に私を呼ぶこと……良いわね？」

「イテテ……わ、分かったよ」

「ははっ！すでに尻に敷かれてるな！」

なんだか理不尽な気がするが、ここで突っ込んだらやぶ蛇なのは分かる。

俺は大人しく氷魔法に集中し、都市へ向かった。

夜になったが、何とか帰ってくることができた。

すると、クオンが知らせていたのだろう……ガルフさん達が出迎えてくれた。

「クレス、よくやったわい！あとはワシらに任せろ！」

「た、助かります……疲れたアアアア」

「モウ」

「うんうん、良い子だったね。それじゃ、君達はあるうちに仲間がいるから」

やはり元々は大人しい性格なのだろう、言うことを聞いてガルフさんについていく。

疲れた体に鞭<むち>を打ち、俺は屋敷で姉さんとマイルさんに報告した。

「なんと、本当にエルフがいたのですか……驚きですね」

「俺もびっくりしましたよ。とりあえず、交渉はできそうです」

「十日後に森の中でということは、大勢の護衛などは連れていけないですか」

「あんまり警戒させたくないですね。少数精鋭で行こうかなって」

「危険ですが、そちらの方が無難そうですね」

すると、それまで黙っていた姉さんが手を挙げる。

「どうしました？」

「私が会議に参加する。私は森の中でも自由に動けるし、いざとなったらクレスを抱えて逃げられる」

「まあ、確かに……では、お願いしますね」

「んっ、任せて」

姉さんは両手で拳を作ってフンスフンスしている。

なんだか、小動物みたいで面白い。

確かに他のエルフは好意的とは限らないから、万全を期した方がいいか。

何より……交渉人として、俺では威厳がない。

「その他の面子は追々決めるとして……休みます！ 限界です！」

「まあ、主人殿にしては頑張りましたからね」

「そぞっ！ というわけで、明日は休みます！」

「何かやりたいことがあるのですか？」

「せっかく風の魔石をもらったので、ドワーフさん達に作ってもらおうかなって」

「そういうことなら休んでも良いでしょう」

こうして、俺はうまく休みをゲット。

半分仕事みたいに言えば、通ると思ったのだ。

ふふふ、扇風機もそうだけど……アレなんかも作っちゃうぞ。

翌日、俺は久々に惰眠^{だみんむとほ}を貪っていた。

そうだよ、これが本来の俺だね。

最近は頑張りすぎてたし、ちよっとくらいいいでしょ。

「まだまだ寝られるぞ」

「流石に起きてください」

「うひあ!？」

布団を引^ひつ剥^べがされ、地面に転がり落ちた。

目を開けると、そこには笑顔なのに怖いクオンがいた。

「な、何すんのさ！ 今日休んでいいって！」

「確かに言いましたけど……もうお昼ですよ？」

「うそん……道理でお腹減ってるわけだね」

意識した瞬間、お腹がクルルと鳴く。

「うん、めちやくちゃ寝たらしい。」

「はあ……ほら、ドワーフさん達に話があるのでしよう？」

「そうだった。仕方ない、快適な暮らしのために頑張りますか」

俺は仕方なくベッドから出て、着替えて部屋を出る。

そうして、遅めの朝食兼昼食を食べることにした。

「うんうん、食料も充実してきたね。量も種類も豊富になってきた感じ」

「ええ、これも探索が楽になったおかげでしょう。あとは街道整備による他国との交流や、森の資源の確保ができれば一気に進むかと」

「そうだね。そのためには都市を暮らしやすくすることと、エルフとの交渉を頑張らないと」
都市の整備はドワーフ族と獣人族のおかげで大分良くなった。

人族も町の治安に貢献したり、砦などで勤めてくれている。

概ね、上手くいっていると言っている。

「あとはダンジョンとかあれば最高なだけけど」

「ダンジョンですか……我が国には少ないと言われてますね」

「そうみたいね。他国ではいくつもあるけど、うちは少ない……未開の地が広いからかって」

「なるほど、つまり……主人殿は、エルフの住まう地にダンジョンがあるのではないかと」

「その可能性はあるかって。だって人の手が数百年入ってないってことだし」

あの感じだと、人と触れ合ったのは久しぶりだろう。

そもそも、エルフ自体が伝説の存在に近いし。

きつと、イチゴのように珍しい食材があるだろう。

すると、クオンが何やらモジモジし始めた。

「どうかしたの？」

「……あの人にイチゴですか？ あれを凍らせた物をあげてましたよね？」

「ああ、イチゴシャーベットもどきね……あれ？ 食べたかった？」

「べ、別にそういうわけでは……いえ、食べたいです」

「なんだ、言えば良かったのに」

そっか、それもあつて起こしに来たのかも。

俺は厨房にある保管室からイチゴを取り出し、瞬間冷凍させる。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます……っ！? 甘酸っぱい味……これがイチゴ……甘みもあつて不思議ですね」

「うんうん、滅多にない味わいかも。そうだ、これを使ったデザートを作ろっと」

「——今なんと」

気がつく、目の前にはクオンのドアップ。

それと同時に心拍数が上がっていく。

相変わらず、自分が美人という自覚がないのか。

「お、落ち着いて」

「私は冷静です。それより、デザートと……イチゴがアイスのようになるのですか？」

「まあ、そっちもできるけど……と、とにかくガルフさんのところに行くこ！」

「わわっ!？」

あまりの近さに耐えきれず、クオンの手を取って厨房を飛び出す。

なぜだかクオンが黙ったので、そのままガルフさんのところに行く。

「ガルフさん！」

「むっ、クレスか……手を繋いで、随分と仲が良いことじゃな」

「ち、違います！」

「わ、忘れてた！」

人に指摘されたことで照れくさくなった。

アスナといい、最近はクオンも女性らしくなってるから心臓に悪いや。

すると、ミルラさんがガルフさんに拳骨^{げんこつ}をお見舞いした。

「何をからかってんだい！」

「痛いわい！」

「全く、すまないねえ。それで、こいつに何の用だい？」

「えっと、作ってほしい物がありまして」

まずは氷と風の魔石を使った扇風機を提案した。

俺は身振り手振りで、どうにか仕組みを伝える。

完全なエアコンは無理でも、これなら何とかなりそうだし。

「ふむふむ……氷で冷やした風を、羽根で拡散するといったところか」

「こりゃ、簡単な仕組みだけど盲点だったね」

「まあ、そもそも普通にやったら熱風だから」

「確かにそうじゃな。あくまでも、クレスの氷魔法があつてのことか。これくらいならば、そんなに時間をかけずに作れるわい。要はドライヤーのような物じゃし」

「本当!? それじゃ、お願い！」

「あたしらに任せておくれ！ ラガーの悲願のお礼は、これくらいじゃ返せないけどね」

よしよし！ これで扇風機ができたら寝るのが楽になるぞ！

空気を循環させて建物全体を涼しくすることができるし。

これを宿とか各仕事場に配置したらみんな喜ぶよね。

「あっ……もう一つお願いしてもいいですか？」

「あっ……もう一つお願いしてもいいですか？」

「むっ、物によるが……」

「もちろんだわ！ 任せて！」

何か言う前にミルさんに背中を叩かれ、ガルフさんが咳き込む。

なんだか他人事とは思えない光景……うちの周りには、強い女性しかいないね！

「はは……えっと、氷を削る機械を作ってほしいんです」

「ゴホッゴホッ……氷を削る？ どういうことじゃ？」

「氷を上置いて下にあるミキサーで細かくしていく感じですよ」

身振り手振りで伝える。

すると、俺の拙い説明でも通じたらしい。

流石は物作りのプロ、ドワーフ族である。

「粉末状にすれば良いってことか」

「そうよね。だったら土魔法のドリルを応用すれば……」

「うむ、それならいけるわい。クレス、あとは任せるがいい」

「うん！ お願ひ！」

正直言つて、アレができればアイスクリームより数を出せる。

そしたら俺達だけでなく、住民にも行き渡るようになるはず。

アイスクリームは富裕層向け、アレは庶民向けとかにしても良い。

「さて、仕事は終わったしのんびりするかな」

「主人殿は特に何もしてないですけどね」

「ぐぬぬ……あれ、何してるんだろ？」

広場辺りに来ると、子供達が集まっていた。

その中心にはアスナやアークがおり、何やら困っているようだ。

「二人共、どうしたのー？」

「クレス！ 良いところに来たわ！」

「なんかよ、子供達が王都の遊びを教えてつて言つてきてよ」

「私達、遊びらしい遊びとかしてこなかったし。精々、かくれんぼや鬼ごっこくらいしか知らないわ」

確かに二人は高位貴族だし、小さい頃以外は遊んだりしないか。

それに比べ、俺ときたら……うん、遊んでばかりだったね！

「ふふふ、伊達にサボつて遊んでないからね」

「自慢になつてないわ……」

「ほんとそれだわ……」

「まあまあ、それで主人殿は何か考えがあるのですか？」

「うーん、そうだなあ……」

俺が知ってる前世の遊びは、道具が必要な物が多い。

道具なしで遊ぶ物なら、こちらでも同じように遊べるだろう。

大した道具を使わずに、俺が用意できる……あっ！ 実験にもってこいじゃん！

「その顔は何か思いつきましたね？」

「まあね。君達、明日にはできるようにするから待てるかな？」

「はい！！」

「うん、良い返事だ。それじゃ、俺達は坂道がある場所に行こうか」

俺は子供達と約束をし、準備をして都市の中にある坂道にやってくる。

元々は土手で下には川が流れていて、憩いの場でもあったらしい。

俺が水を満たしたので、整備をしつつ少しずつ元に戻っているみたい。

「それで、何をするのよ？」

「まあまあ、まずは見ててよ」

実は、俺がガルフさんに頼んだのはかき氷機だ。

イチゴが採れるなら、それでソースを作ってかき氷ができるはず。

そして、そのためにはただの水ではダメだ。

両手を前に出し、ふわふわの雪のような氷をイメージする。

「舞い降り雪吹雪——ホワイトスノー」

「わぁ……綺麗」

「これは幻想的で見事ですな」

「おおっ！ すげー！」

空から雪が舞い落ちて、草むらの坂を白く染めていく。

俺は集中して途切れさせないように、雪を積もらせた。

そして数分後……辺り一面に雪がこんもり積もっていた。

「ふう、できた……」

「クレス！ これは何!？」

「雪ってやつで。氷の変化版みたいな？ ちょっと、試しに地面を足で踏んでみて」

「や、やってみるわ……シャクシャクして楽しいかも」

最初は戸惑っていたアスナも、次第に笑顔になっていく。

そう言えば、前世で初めて雪に触れたとき、ただ踏むだけで楽しかったよね。

これだけでも、子供達は遊べそう。

それを見て、クオンやアークも同じように雪を踏んでいく。

「なるほど……何だか癖になります」

「足が沈んでいく感覚もなんか面白いな」

「ただ、本番はこれからのさ。さあ、これを使って遊んでみよー！」

俺が準備したのは荷物運び用のソリだ。

ここまでくれば、何をやるかは決まってる……雪ゾリですね！

「何に使うのかと思ってましたが、これをどうするの？」

「ふふふ、これに乗って坂道を滑り落ちるのさ」

「へっ？ あ、危ないじゃないですか」

「まあ、多少はね。だから、俺達が実験しようって話」

「なるほど、我々が実験を……では私がやります」

「それじゃ、俺は後ろに乗るかな」

「二人乗りなんですか？」

「一人でもできるけど、こっちの方が楽しいよ」

まずはクオンを前に乗せ、俺が後ろに乗る。

そしたら後ろにいるアークに押してもらってわけだ。

雪の坂の前にすると、年甲斐もなく俺もワクワクしてきた。

「いくぞ？」

「ワクワク……こい！」

「いつでも」

「んじゃ……いけー！」

「ヒアアアア!?」

思ったより高スピードで坂道を滑り下りる！

「うわぁ!？」

「きゃっ!？」

ソリから身を投げ出された。

だが……ふわふわの雪のおかげで全然痛くない。

「プハッ！」

「主人殿!? 大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫だよ。ほら、この通り」

俺が手足を動かすと、抱きしめていたクオンが離れる。

雪ゾリとは違う意味でドキドキします。

「ほっ……しかし、これはけっこう危ないですよ」

「ちよっとスピードが出すぎたかな。でも、雪があつたから痛くなかったでしょ？」

「確かに痛くはなかったですね。スピード調整と、万が一に備えて下で受け止める人員を用意すれば良いかと」

「そうだね、安全が第一だし」

ソリを回収したら、歩いて上に戻る。

すると、アークが頭を下げてきた。

「すまん、ちょっと強かったか」

「うん、あれくらいないとつまらない気もするし。ただ子供は、もう少しスピードを緩めた方が
良いかもね」

「そうするか。しかし……楽しそうだったな」

「そうよ！ 私達もやってみないと！」

「はいはい、分かったよ」

ソリを用意し、今度はアスナとアークが坂道を滑り下りる。

俺が手加減したからか、二人が吹き飛ぶことはなかった。

「ふむふむ、これくらいなら平気か」

「でも少しつまらないわ！ さっきみたいのやりたい！」

「俺もだ！ あれをやってみたいぜ！」

「どちらにしろ、何度かは実験しないとね」

その後、俺達と同じようにアークとアスナも雪山に埋まった。

二人は雪にダイブして、実に晴れやかな表情だ。

「ああ！ 気持ちいい！」

「何これ！ 楽しいわ！」

「怪我もなさそう……」

「ですね、大人はこれくらいでいいかと。先ほども言いましたが、受け止める人員として獣人を配
置しましょう」

「獣人がいいの？」

「彼らは身体能力が高いので、万が一子供が吹き飛んでも受け止められます」

「なるほど、理にかなってるね」

その後も何度か実験し、俺達は普通に楽しんだのだった。

気がつくと日が落ちてきて、肌寒くなってきた。

「さ、寒い？ 嘘だろ？」

「確かに、なんだか寒気がしてきたわ」

「ああ、ずっと雪に触れて体が冷えたんだと思う。あつたまらないと風邪を引くから、屋敷に戻
ろうか」

「その辺りの対策も必要ですね」

屋敷に戻り温かい風呂に入った。その後マイルさんと話し合いをする。

議題は子供の遊びと、エルフとの会議についてだ。

「子供が遊びに関心を持ったことは素晴らしいかと」

「そうだね、それだけ余裕が出てきたってことだもん」